

「10.16 反戦・反貧困・反差別共同行動 in 京都の基調報告」を読んで

大谷美芳(2022.11.22)

(注) 集会基調は、下記チラシをクリックして下さい。

中心論点は「12年体制論」、それを考える。その前に、違和感と批判。



①統一教会問題 日本の韓国・朝鮮に対する侵略と植民地支配 それが根本原因

拉致問題と本質的に同一。「反共であるだけではなく、日本の朝鮮への植民地支配を逆手に取った差別者集団」。批判の前に、侵略と植民地支配の謝罪と賠償を政府にさせることができているという日本人民の反省、これが必要なのではないか。

②ウクライナ戦争 ソ連崩壊と東欧～中央アジアに多数の主権国家 それが出発点

「……民族解放闘争=正義の戦争という見解は取らない。NATOの東方拡大……ゼレンスキーの基盤であるウクライナのオルガルヒ……の汚職にまみれた無責任、無能……。」

ウクライナの祖国防衛支持ではなく、ブルジョア階級批判。主要矛盾は抑圧民族と被抑圧民族の矛盾、「帝国主義と民族問題」の観点が失われているのではないか。

ソ連の崩壊は社会主義の崩壊ではなく、帝国主義の崩壊。アメリカ帝国主義の覇権の拡大よりも、西欧には遅れたが、ブルジョア革命(語感的には市民革命の方がいいが)、その大波であった(いずれ東進し中国に波及)。アジアとアフリカの植民地独立・民族解放に連なり、20世紀を画する世界史的な意義がある。そういう観点が無いのではないか。

ロシアの侵略戦争はそれに対する反動と反革命。ウクライナはそれに対する民族 or 国民戦争。社会主義の即実現は難しくても、民主化は達成される。ただ、民族問題は、20世紀的な民族自決権だけでは解決せず、21世紀の社会主義革命の課題になるのでしょうか。

(1)「55年体制」から「12年体制」へ どう変わったのか？

「12年体制の第一の要素は集团的自衛権体制……と歴史修正主義の結合」。「第二……は新自由主義」。「第三……は内閣府を中心とした『専制政治』」。第二に注目。

・労働者階級が増大から大分裂へ

「55年体制」はブルジョア民主主義。基礎に、資本主義の高度成長とそれによる社会の工業化・第二次産業化と都市化、農民の減少と労働者階級の増大があった。

「12年体制」の基礎にあるのは、金融資本主義、資本主義の停滞と腐朽性、寄生性。高度成長の終焉と資本輸出・グローバリズムによって、国内的には工業的空洞化と第三次産業化があり、福祉の破壊と格差の拡大と貧困の蓄積がある。増大した労働者階級の大分裂がある。上層(「新中間階級」と中層(正規)と下層(非正規=「アンダー・クラス」)。

・権威主義と言えるか？

権威主義は、ロシア・プーチン体制、しかし典型は台湾・韓国やASEANの開発独裁。これは、かつてのソ連や現在の中国などの官僚制国家資本主義(全体主義)と並び、後発資本主義を育成し成長させ発展させるエンジン(アフリカがアジアに続く)。経済発展で国民を統合するが、資本主義の発展が労働者階級を増大させ、その階級闘争が民主化闘争として発展する。韓国・台湾をはじめとして、ブルジョア民主主義体制も成立。

「12年体制」は、基礎にある資本主義とプロレタリア階級の状態が大きく異なる。第二次ブンドが超性急に言ったなし崩しファシズム or プレ・ファシズムの方がいいか。

・歴史修正主義は帝国主義イデオロギーたりうるか？

米国・西欧・日本と中国・ロシア、帝国主義の覇権闘争の中、歴史修正主義は国民を民族排外主義に統合できるか。それを自民党・安倍政治で主導できるか。容易ではない。

第二次大戦と20世紀をどう総括するか。アメリカの「専制主義対民主主義」(西欧も)とは矛盾する(ドイツとの差異)。中国の「中華民族の偉大な復興」と比べると矮小である。イデオロギー的に脆弱。反日の統一教会と家父長的家族観で癒着する醜態も起きる。

(2)プロレタリア階級の階級闘争はどう変わるか？

「現在の状況を根元から変えるためには、個別課題へのオポジットだけではなく総体へのオルタナティブを掲げる政治潮流が必要である。」「必要なのはこの新たな全国的政治潮流の形成とミュニシパリズム、そして階級的=社会的労働運動の復権との結合であろう。」

・「新しい政治潮流」とは？

革命党派の共闘(経験的には1970年闘争の「八派共闘」)が考えられているのだろう。「オルタナティブ」ではあいまい。「新しい資本主義」はない。資本主義は、金融化に突き進む。格差・貧困と環境破壊、人間と自然の両極から社会の桎梏となる。インフレと戦争がそれを加速する。取って代わるのは明確に社会主義。

・「ミュニシパリズム」と「階級的=社会的労働運動」 どういう闘争？

「55年体制」の社会党・総評ブロックが民主党・連合ブロックに再編され、民主党政権に到達して破綻。2015年反安保法闘争は、終わりか、始まりか、両方か。「12年体制」下、人民闘争が、戦争と平和や民主主義をめぐる政治闘争に加えて、もっと広く深い、社会的な闘争として、考えられているのだろう(関西ブンドの「第三期論」を思い出す)。

国家と自治体の行政に対する、直接民主主義的な闘争(議会政党に委任せず代表を直接的に議会に送る)。福祉・社会保障や「公共」=社会インフラなどをめぐる、参加し統制する闘争。そして、この人民闘争の中核に、プロレタリア階級の階級闘争を組織する(「住民」「市民」は第三産業化における労働者)。そのために、大分裂しているプロレタリア階級を統一する。それには、社会主義の政治と同時に、下層に依拠し、非正規雇用の禁止・生活できる最低賃金・ベーシックインカムなど、大分裂の直接的原因を除去する闘争。

総資本=国家に対抗して、人民の種々様々な自主的大衆的な組織が形成される。そういうイメージではないか。対抗社会 or 陣地戦。ただ、それだけでは構改派、今は前途遼遠だがいずれ機動戦 or 革命戦争が必要(関西ブンドは両方の体質)。

(3)ソ連論・中国論 それが新しい社会主義 or 社会主義のルネサンスを起動する

「かつての『社会主義』ではない新たな真の社会主義が求められている。」いつまでもカッコつき「社会主義」と言うのでは、「オルタナティブ」とあいまいになる。

・国際共産主義運動の総括と現代帝国主義論 両方に要となっている

ロシアも中国も、民主主義革命に直面していた。そこで「プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁」(NEPの実質)や「人民民主主義独裁」を樹立した。そこから工業化と農業集団化で、社会主義革命(プロレタリア階級独裁)へ進もうとした。しかし、工業の管理を基礎に官僚主義が登場し、国家所有は官僚制国家資本主義に変質した。プロレタリア階級が、官僚主義に反対し、自主的に管理する階級闘争、それを組織できなかった。中国の文化大革命は観念論と主観主義で破綻した(連合赤軍事件はそれに連なる)。

20世紀は、民族解放闘争・ブルジョア革命と資本主義化に終わった。そこに登場した官僚制国家資本主義は、開発独裁と並んで、後発資本主義の、そしてグローバリズム=世界資本主義のエンジンとなった(ソ連も世界恐慌後の30年代に工業的發展)。新しい帝国主義=中国(ロシア)が登場し(不均等發展)、先発の米国(西欧・日本)と覇権闘争になっている。世界化した資本主義の矛盾が、21世紀を社会主義革命の時代とするだろう。(おわり)